■作品解説：平井　秀明（作曲・台本）：オペラ『かぐや姫』（全２幕）

１９９２年２月、ニューヨークで国際政治専攻の傍ら、音楽院で指揮法も学んでいた頃、日本文化の紹介も兼ねて、「３世代で楽しめる日本語のオペラ」の作曲を思い立った。題材には誰もが知る「かぐや姫」が最適と感じ、姫が月に帰る運命を翁と嫗に告白する「別れのアリア」を、一晩で作詩作曲した。翌年夏、首都ワシントンで新鋭黒人ソプラノの心温まる日本語歌唱で初演されたところ、想定外の大きな反響があり、地元紙第一面をカラー写真で飾るなど将来のオペラ化へのリクエストが多く寄せられた。１０年余り構想を温めた後、パイオニア合唱団から上演の申し出をいただき、２７曲構成・全２幕のオペラを一気に書き上げ、２００３年２月、かつては筍の産地であった東京都目黒区にて、世界初演が実現した。

日本最古の物語である「竹取物語」は、子供にとってはおとぎ話、大人にとっては平安貴族の恋の鞘当、お年寄りにとっては人生の教訓など、世代ごとに異なる楽しみ方がある点も、大きな魅力であろう。第１幕はコミカル風、第２幕はシリアス風と、コントラストを持つ全２幕構成とした。第１幕では、月から来た姫は人間の俗性を伴わず、求婚者たちを冷遇することへの罪悪感も持たない一方で、彼らの訪れに戸惑い、かつ期待を抱く若い娘として描いた。第２幕では、３年余りを経た姫の精神的成長に焦点を当てた。無理難題に苦しむ求婚者たちの哀れな姿や中納言の死を通して、能天気な姫にも同情心が芽生える。

姫の噂を耳にした帝もついに求婚者に加わり、姫も次第に帝の寛容で気高い人柄に惹かれるようになる。（帝は５人の求婚者の長所を全て持ち合わせた、寛容な人格者という雰囲気を意識して、バリトンに設定した。一方で、若いプリンスのイメージも抱き、初演当初より帝のアリアはテノール版も用意し、２０１０年には、第２幕フィナーレの「愛の二重唱」も、ソプラノとテノール用に編曲し初演されている。）
満月の夜が近づくにつれ、地球上での叶わぬ恋、月へ帰るべき辛い定め、そして最愛の翁や嫗との「宿命の別れ」を悟り苦悩するなど、人間らしい喜怒哀楽の情念が宿る。最高権力者の帝や全能の姫をもってしても得られない幸せが存在し、また姫を失う翁と嫗にとり、不老不死の薬は無意味である。まさに、人生の不条理こそ、この作品に秘められた深いテーマである。

台本にも様々な工夫を凝らし、原作では描かれなかった幼少の姫、里の母子たちを登場させ、親子共演までも可能にした。５人の求婚者たちにも、貴公子の車持皇子、腕っ節の強さを誇る悪漢の大納言、真面目な役人の中納言、笛の名手である石作皇子、おどけ役の公家、と対照的なキャラクターを付けた。さらに、姫のライバル役として、竹取の里一番の美女こと「里の娘」も登場する。

竹取伝説の根底には、地球と月・宇宙間の人々の交流というテーマが流れ、日本の枠を越えたスケールの大きな物語と捉えられる。人間の宿命である「出会いと別れ」を巧みに描いた日本最古の物語の奥深さを実感し、作曲にあたっては東西融合を意識し、日本的様式に限定せず、ユニヴァーサルな視点で国際的に理解しやすい作風を目指した。*“Princess from the Moon”*と英訳してアリアを発表した背景にも、こうした思いが込められている。

２００６年６月には、“２００６日豪交流年”記念イベントに選ばれ、多数の楽曲追加など改訂も施し、日豪両国のキャスト・合唱により豪州公演も行われた。２００９年４月には、日本・チェコ両国の合同キャストと合唱によるプラハ公演も実現し、２０１０年１２月の高松公演（香川県）の際には、第２幕冒頭に求婚者たちの宝探しの結末を描いた楽曲を追加し、３７曲構成による完全版が完成した。２０１２年８月には、オーストリア・アニフ市より招聘され、「ザルツブルク音楽祭」開催中に、ザルツブルク、アニフでの両公演、２０１５年８月には、ロサンゼルスにて、「二世週祭 75 周年」・「終戦 70 年」記念公演が実施された。

留学先で祖父母を想いながら書いた「別れのアリア」（“おじいさん、おばあさん、いつもわたしは幸せでした・・・”）が、１０余年を経て一粒の種からオペラに成長した。２００２年１１月３０日、ついに初演の稽古初日を迎え、当時入院中だった祖父平井康三郎（「平城山」、「スキー」、「とんぼのめがね」、「ゆりかご」などの作曲で知られる）を稽古前に見舞い少しオペラの話をした。祖父の長年の夢だったオペラ作曲を私が引き継ぎ、待望の初稽古が始まる旨を報告すると、とても喜んでくれた。しかし、稽古に出かける頃に容体が急変し、祖父は静かに息を引き取ったのだった。そのため祖父を見送ることと、月へと旅立つかぐや姫を見送るイメージが重なり、極めて感慨深いものがある。「３世代で楽しめるオペラ」を通じて、希薄となりつつある現代の家族の絆を強める一助にでもなれば、と願っている。

平井　秀明

オペラ『かぐや姫』（全２幕）　作曲・台本：平井　秀明　　**文:サークル「竹取の里」**

■作品解説：

“三世代で楽しめる”オペラ『かぐや姫』は、「竹取物語」を題材に、心に残る美しい旋律が反響を呼び、03 年世界初演以来すでに国内外各地（東京、埼玉、千葉、神奈川、茨城、新潟、福井、岡山、香川、徳島、キャンベラ、プラハほか）で 30 回以上の再演を重ね、“新たな国民オペラ”（『音楽の友』誌）として、注目されている。海外では、06 年、日豪両政府主催“日豪交流年”記念豪州公演、09 年、３日前に札止めとなるほど超満員のチェコ・プラハの殿堂スメタナホール公演共に大成功を収め、12 年 8 月、オーストリア・アニフ市の招聘で、世界最高峰の“ザルツブルク音楽祭”開催中に、ザルツブルク、アニフでの２公演を行い、絶賛された。さらに、『詳解　オペラ名作１２７』（野崎正俊著／ショパン社）の新装改訂版に、数少ない日本オペラ作品の一つとして収録され、14 年 2 月には、ミューザ川崎シンフォニーホール・リニューアルオープン記念シリーズのフィナーレを飾り、15 年 8 月、終戦 70 周年記念メインイベントとしてロサンゼルス公演が大成功を収めるなど、今話題沸騰中の作品である。

■あらすじ：

◆第１幕 第１場：

昔、竹取の翁（おきな）が、野山の竹を採って暮らしていると**（アリア「竹取の歌」）**、光り輝く竹の中から大変美しい赤ん坊を見つけます。翁は天からの授かり物と思い、妻の嫗（おうな）とともにその子を大切に育てることにしました**（二重唱「かぐや姫の誕生」）**。一生懸命に働く二人は人々に慕われており、そこに赤ちゃんが授かったことを、里人も喜びます**（混声合唱「祝宴の歌」）**。その子は“かぐや姫”と呼ばれ、不思議なことに三ヶ月ばかりのうちにすくすくと育ち、人も羨む美しい娘となりました**（児童・女声合唱「幼少のかぐや姫」）**。翁も嫗もこの子を見れば苦しいことを忘れ、腹立たしいことのない毎日を過ごしました。

◆第１幕 第２場：

姫の美しさはたちまち世に知られ、貴族や権力者たち５人が求婚に訪れます。その求婚の物語の中に、憧れの車持皇子（くらもちのみこ）が、かぐや姫に心を奪われる様子に**（アリア「車持皇子の求婚」）**、里一番の美女こと里の娘が嫉妬する場面が置かれます**（アリア「恋する里の娘」）**。容姿端麗な貴公子の車持皇子、権力に頼る横暴な大納言**（アリア「天下の大将ここにあり」）**、勉学に励んできた真面目一方の中納言、苦労知らずに育ったおどけ役の公家**（アリア「麻呂のプロポーズ」）**、笛の名手こと石作皇子（いしづくりのみこ）が姫をめぐり競いますが、姫は冷たくあしらいます。困った翁と嫗が嫁入りを根気よく勧めるのに応え、姫は嫁入りの条件として求婚者たちに、宝物を用意するように告げます**（レチタティーヴォ「五つの願い事」）**。

石作皇子には“天竺の仏の御石の鉢”（てんじくのほとけのみいしのはち）、車持皇子には、はるか東方の海山にあるとされる“蓬莱の玉の枝”（ほうらいのたまのえ）、公家には唐の国（今の中国）に伝わるという“火鼠の皮衣”（ひねずみのかわごろも）、大納言には“五色に光る龍（たつ）の首の玉”、中納言には、“燕（つばくらめ）の子安貝”。どれもこの世にはないと思われるものばかりで、姫には嫁ぐ気持ちの無いことを示します。姫の無理難題に謀（はかりごと）をめぐらす男、馬鹿らしさを覚える男、大胆に挑戦する男など、混乱の中、車持皇子は蓬莱の玉の枝を求めて船出し、家来や家人が見送ります**（混声合唱「船出の歌」）**。

◆第２幕 第１場：

宝探しの長旅から求婚者たちが戻り宝物を披露しますが、石作皇子の仏の御石の鉢を、姫は偽物と見破ってしまいます。苦難の旅を経て戻ったという車持皇子の志に翁は感動し、蓬莱の玉の枝の余りの美しさに姫も観念しそうになりますが、里の娘が偽造と暴き、憧れの車持皇子の心を奪い返す好機と喜びます。同じく、公家も大納言も失敗し、最後は真面目な中納言のみとなります**（レチタティーヴォ「求婚者達の帰還」）**。中納言が燕の子安貝を取るために、落下して病床にあることを知り、姫に同情心が芽生え、お見舞いの歌を送ります**（アリア「お見舞いの歌」）**。しかし、努力の甲斐なく中納言は亡くなり**（アリア「中納言の辞世の歌」）**、家来たちが祈りを捧げます**（混声合唱「哀悼歌」）**。

かぐや姫の噂は、やがて帝の耳にも届き、恋の鞘当に敗れた公家は、帝と姫との間を取り持ち、褒美を得ようと画策します（**レチタティーヴォ「褒美は全て麻呂のもの」**）。帝は姫をお側に仕えさせるよう翁に命じますが、拒み続ける強情な姫に困り果てた翁は、狩りと偽り、帝を姫に会わせる計らいをします。帝の深い愛情に触れて（**アリア「帝の寵愛」**）、次第に姫も心を開きますが、満月の夜が近付くにつれて悲しい表情を見せるため、心配した嫗（おうな）が、姫に悩みを打ち明けるようにと優しく話しかけます（**アリア「嫗の悩み」**）。姫は月の世界へと帰る定めを悟り、ついに中秋の名月を前に、翁と嫗に別れを打ち明けます（**「別れのアリア」**）。

◆第２幕 フィナーレ：

初めて愛情の芽生えた帝にも二度と会えぬ思いを伝える場面が突然やってまいります。帝は兵を集め、翁の家で姫を守るように命じます（**男声合唱「戦の時よ」**）。姫は自分の生まれた遥か彼方の月へと誘う天女達（**女声合唱「天人の到来」**）、育った地上に残るように諭す村の娘たちの声の狭間で思い悩みますが、天の王はその迷いさえ許しません。最後の力を振り絞る決意で天の王の命令を制する姫は、不老不死の薬を大切な人たちに渡し、今や愛し合う帝との宿命の別れを手紙に託します（**「愛の二重唱」**）。天の王の魔力により、姫を守るために居並ぶ兵士や村人が、抵抗する力さえ失う中、かぐや姫は月の都へと旅立ち、地上に残された者達が感慨深く見送るなか、その姿を地上から永遠に消します（**混声合唱「かぐや姫の旅立ち」**）。

※注釈　原作の登場人物の読み方は川端康成氏の訳による。